

着が認められた土器も含まれる。村上（2017）で器壁の厚さが1 cm 超える厚手の土器として1類に分類された Table 5-1 の測定番号 18（Nobotoroitskoe10-P1, Fig.4-1 の 22 と 23）の土器は、 $11,250 \pm 80$ ^{14}C yr BP（12,134 ~ 11,813 cal yr BP, 1 σ ），器壁の厚さが5 ~ 6 mm 程度で、口縁部外面を面取りするもののうち、穿孔を持つ 4a 類に分類された Table 5-1 の測定番号 19（Nobotoroitskoe10-P2, Fig.4-1 の 25）の土器が、 $11,620 \pm 70$ ^{14}C yr BP（13,495 ~ 13,380 cal yr BP, 1 σ ）の年代測定値を示している（國木田ほか 2017；橋詰 2017）。

3) 年代測定については、本遺跡では 159 点の炭化物の出土位置を記録しており、多数の年代測定用サンプルの採取に成功している。比較的豊富な炭化物の出土も本遺跡の特徴といえる。上記した土器付着炭化物試料 2 点を含む計 19 点の試料の年代測定がおこなわれた。國木田ほか（2017）では、年代測定を実施した 17 点の炭化物試料のうち、11 点が $11,000$ ^{14}C yr BP 代前半の値を示し、較正年代も約 $13,000$ cal yrBP が分布の中心であると推定された。この年代値は、國木田・松崎(2016)で報告されたオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の年代値（ $11,150 \sim 10,930$ ^{14}C yr BP, $13,094 \sim 12,952$ cal yr BP, 1 σ ）に非常に近い。このように年代測定値からも、本遺跡とオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡とが時間的に比較的近い関係であることを推定可能である。

Table 4-1, Fig.4-1 に本遺跡とオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡出土遺物を示した。本遺跡の調査面積（ 47 m^2 ）に比べて、橋詰ほか編（2016）で報告したオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡（2012 年，2013 年日本隊調査区）の調査面積は限定されている（ 8 m^2 ）。そのため、Table 4-1 では、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡は一見出土器種のヴァリエティが乏しいように見える。しかし、Table 4-1 の *2 ~ 4 に示したように、一括取り上げ資料に含まれていた有茎尖頭器や、2013 年ロシア調査区で出土した舟底形石器、打製石斧などの器種を加えるとさらに両遺跡の器種組成は似通ってくる。さらに、未報告の 2015 年調査の 12 m^2 の出土石器を加えるとさらに共通性は高まるものと予測できる。Fig.4-1 をみても、両面加工の石器（ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 [NTR10] : 1 ~ 5, 12, 13, 14 ; オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 [OR10] : 26 ~ 29, 36, 37）と、関連する剥片石器（NTR10 : 3, 15 ~ 17 ; OR10 : 40, 41），細石刃関連石器（NTR10 : 8 ~ 10 ; OR10 : 32 ~ 34），石鏃（NTR10 : 7 ; OR10 : 31），有茎尖頭器（NTR10 : 6 ; OR10 : 30），舟底形石器（NTR10 : 11 ; OR10 : 35），石斧（NTR10 : 12 ; OR10 : 36），石錘（NTR10 : 20 ; OR10 : 44），磨石（NTR10 : 21 ; OR10 : 45）などといった器種組成やそれぞれの石器の形態などには多くの共通点を見出すことができる。

4-2 課題

本遺跡では、C 列の 3 ~ 5, D 列の 3 ~ 5, E 列の 3 ~ 5, F 列の 3 ~ 5, これらの各グリッドにまたがる範囲の 3 層上部で、多くの人工遺物や炉跡を内部に含む窪み地形を確認し、本報告では 1 号くぼみ地形と呼称した（Fig.3-4-1）。大きさは、長軸方向に 4 m ほど、短軸方向に 3 m ほど、深さ 0.6 m で床面は 6 層の砂礫層に達する。検出当初は、住居址など何らかの遺構である可能性も検討したが、平面形や床面（の可能性のある箇所）も不整形で、人為的な掘り込みであると認めるのは難しい。2004 年の調査が終了してから 12 年以上が経過した現在でも、類例は増えておらず明確な性格付けをすることはできていない。風倒木など自然の営為で形成された可能性があるが、人工遺物や炉跡などが伴うことから、この地形を利用してなんらかの人類の活動がおこなわれていたことは推測できる。オシポフカ文化期の住居址や遺構については、現状では反証可能性を十分に担保可能な形で記録が残されている事例の蓄積は少ない。本遺跡の事例も含め、今後の類例を待った上で改めて検討が必要である。

Table 4-1 ノヴォトロイツコエ 10 遺跡とオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の出土遺物

Table 4-1 Artifacts from the Novotroitskoe 10 site and the Oshinovaya rechika 10 site

① ノヴォトロイツコエ10遺跡出土遺物(2003年, 2004年調査)

	尖頭器	有茎尖頭器	石鏃	両面加工石器	半両面加工石器	細石刃核	細石刃核ブランク	細石刃	削片	舟底形石器	局部磨製石斧	搔器	削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	縦長剥片	石核	敲石	磨石	石錘	穿孔のある礫	二次加工のある礫	原石	土器片	炭化物	小計	剥片(*2)	計
計	142	1	1	29	1	4		27	7	1	1	29	19		25	15	12	22	2	1	1	1	8	2	80	159	590		590
%(*1)	24.1	0.2	0.2	4.9	0.2	0.7		4.6	1.2	0.2	0.2	4.9	3.2		4.2	2.5	2	3.7	0.3	0.2	0.2	0.2	1.4	0.3	13.6	26.9			

*1: %は三次元位置情報を記録して取り上げた出土遺物590点中に占める割合を示す

*2: 本遺跡では剥片はグリッド・人工層位単位で一括して取り上げたため、三次元位置情報を記録して取り上げたものはない

※網かけをおこなっているのはオシノヴァヤレーチカ10遺跡では出土しているが、本遺跡では出土していない器種を示す

② オシノヴァヤレーチカ10遺跡出土遺物(2012年, 2013年日本隊調査区)

	尖頭器	有茎尖頭器(*2)	石鏃	両面加工石器	半両面加工石器	細石刃核	細石刃核ブランク	細石刃	削片	舟底形石器(*3)	局部磨製石斧(*4)	搔器	削器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	縦長剥片	石核	敲石(*5)	磨石	石錘	穿孔のある礫	二次加工のある礫	原石	土器片	炭化物	小計	剥片(*6)	計
計	6		1	3		5	2	23	8			3	10	2	7	1		29	4	1	1			1	11	1	119	165	284
%(*1)	5.0		0.8	2.5		4.2	1.7	19.3	6.7			2.5	8.4	1.7	5.9	0.8		24.4	3.4	0.8	0.8			0.8	9.2	0.8		—	

*1: %は三次元位置情報を記録して取り上げた出土遺物284点のうち剥片を除いた計119点中に占める割合を示す

*2: 3次元位置情報を記録して取り上げた石器には含まれていないが、一括取り上げ資料中に1点存在する

*3: 2013年ロシア隊調査区からは1点出土している

*4: 2013年ロシア隊調査区からは打製石斧が1点出土している

*5: 剥片、碎片のうち大きさが2cm以上のものを出土位置記録をして取り上げている

*6: 敲石4点のうち2点は折れ面で接合する

※網かけをおこなっているのはノヴォトロイツコエ10遺跡では出土しているが、本遺跡では出土していない器種を示す

また、石器および年代測定例からは、本遺跡はオシポフカ文化期の中でも比較的限定された時間幅（13,000 cal yr BP 前後）に収まる可能性があり、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡と時間的に近接して残された可能性を推定した。一方で、本遺跡はオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡に比べ、より豊富な土器のヴァリエーションを有する。こうしたヴァリエーションを本遺跡がオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡よりも広い時間幅の中で残されたためと解釈するのか、あるいは土器や炭化物の出土が多いことなどから示唆される本遺跡での行動が、オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡とは異なっていたためと解釈するのか、今後も慎重に議論を進めていかなければならない。オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡では、2002 年、2005 年、2015 年とまだ詳細が報告されていない年次の日露共同調査資料が存在する。こうした資料の整理、分析を進める中で両遺跡の比較検討をさらに詳細に進めていく必要がある。

4-3 小結

本遺跡と同じノヴォトロイツコエ遺跡群に属するゴンチャルカ 1 遺跡は、学史上でも既に著名な存在である（シェフカムート 1997; 長沼ほか 2003; Шевкомуд и Яншина 2012）。しかし、ゴンチャルカ 1 遺跡は非常に多様で豊富な遺物が出土した一方、初期鉄器時代や後期新石器時代などオシポフカ文化期以外の遺物の混在の可能性を排除できない。さらに年代測定値などからオシポフカ文化内に新旧の段階差が存在することなどが想定されていながら（長沼ほか 2003）、寒冷地性の土壌攪乱の影響によって出土遺物のセット関係が不明瞭であり、こうした段階差を追認できるような出土遺物の区分が困難であるなどの問題が

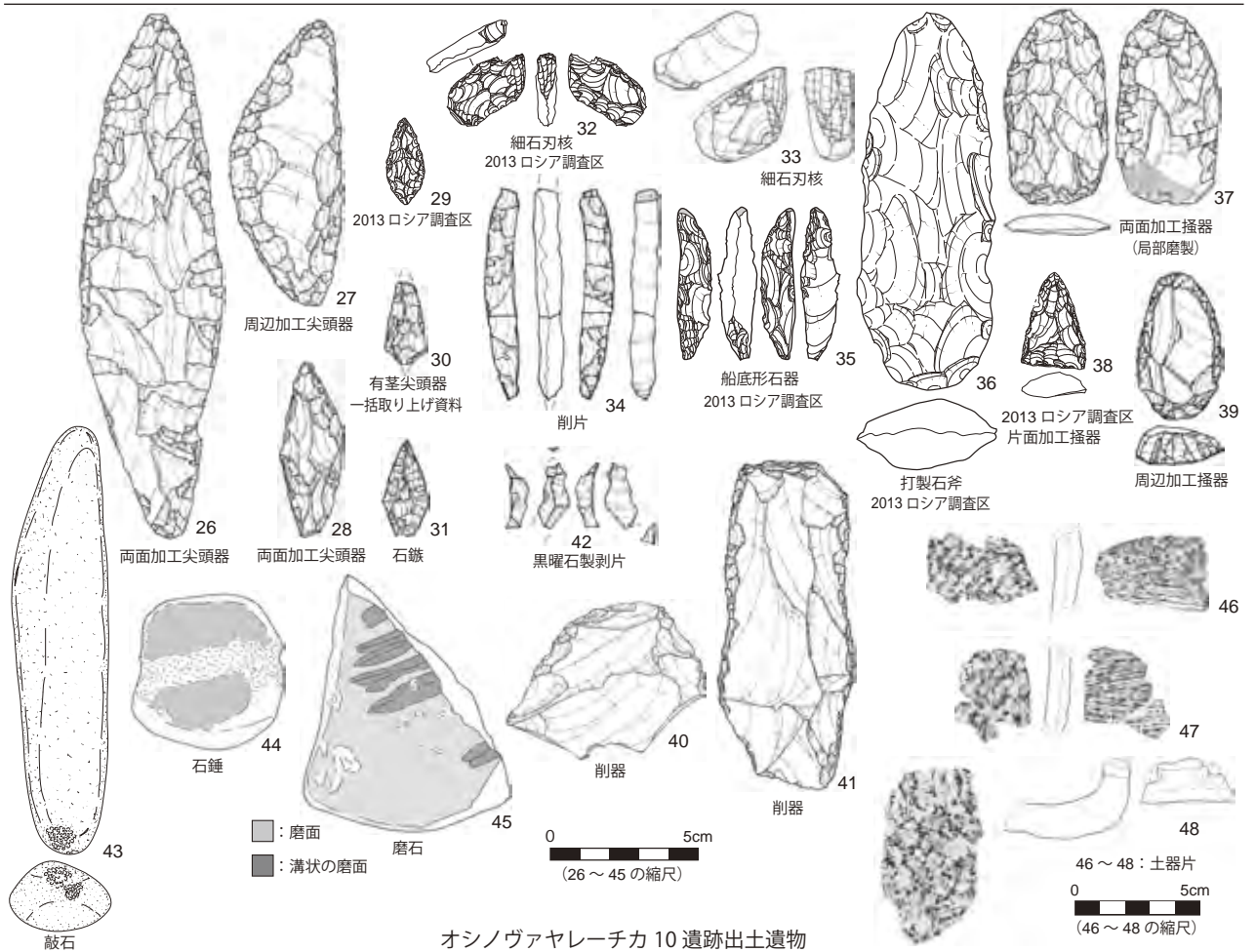
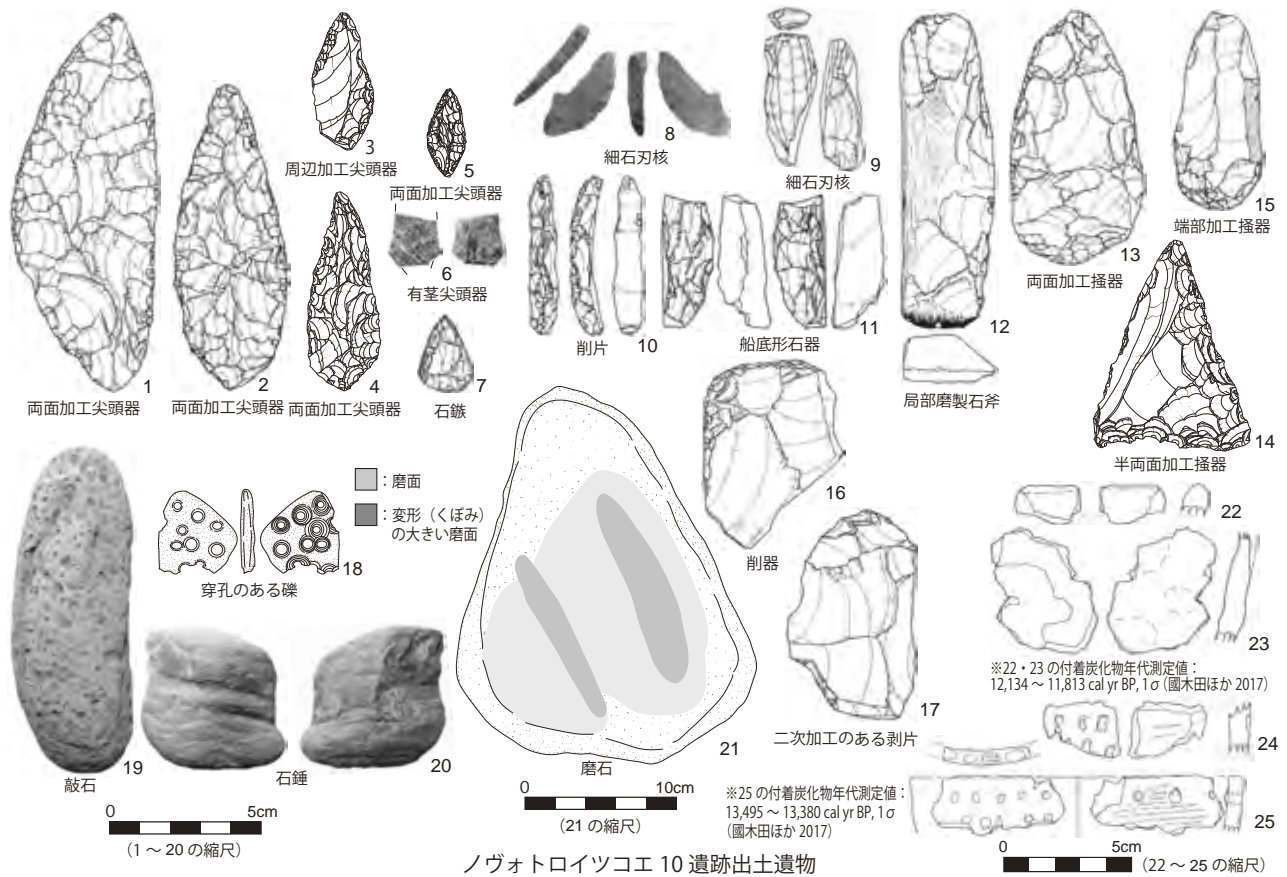


Fig.4-1 ノヴォトロイツコエ 10 遺跡とオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の出土遺物
Fig.4-1 Artifacts from the Novotroitskoe 10 site and the Oshinovaya rechika 10 site

あった。こうした問題点の克服を目指して、より条件の良い事例の蓄積を目指して調査がおこなわれた本遺跡は、遺構の可能性も有する1号くぼみ地形などを検出しながらも、ロシア側調査担当者の急逝などもあり、調査記録の整理に困難な状況が伴っていた。そうした状況にもかかわらず、今回の整理、分析作業によって、①本遺跡はオシポフカ文化期以外の遺物の混在の可能性は低く、一方で、②本遺跡は13,000 cal yr BP前後に位置づけられる可能性が高く、③こうした年代値や出土遺物（特に石器）の特徴は、隣接する遺跡群に所在するオシノヴァヤレーチカ10遺跡に近い可能性がある。以上の諸点を仮説として提示可能である。以上を今回の整理、分析作業の結果に基づく中間的な成果として提示する。

次年度(2017年度)には、ゴンチャルカ1遺跡の2001年発掘調査成果の報告を目指す。橋詰ほか編(2016)および本報告(橋詰ほか編2017)で得られた成果をもとに、ゴンチャルカ1遺跡の調査成果を再評価する作業に臨む予定である。さらに、2018年度にはオシノヴァヤレーチカ10遺跡の2015年調査の報告を含む、編者らの関わってきた調査の現段階での最終報告の刊行を計画している。これらの報告作成にむけた整理、分析作業を通じて、改めて本遺跡とオシノヴァヤレーチカ10遺跡の関係についても考察をおこないたい。

(橋詰)

引用文献

(日本語, 50音順)

- 石渡 明・辻森 樹 2001『日本海及びその周辺域の岩石』, 日本海学研究叢書7, 富山県日本海政策課
- 右代啓視 1993「アムール川下流カルチョーム III 遺跡出土の鈴谷式土器ーハバロフスク州郷土博物館との共同発掘調査よりー」『考古学ジャーナル』358: 28-32.
- 白杵 勲・熊木俊朗・デリュエギン・N. スビジェボイ 1999「1998年度アムール河口部(ニコラエフスク地区)一般調査報告」『北海道考古学』35: 33-45.
- 白杵 勲・N. スビジェボイ 1997「アムール河口部(ニコラエフスク区)の一般調査」『北海道考古学』33: 33-47.
- 沖津 進 2002『北方植生の生態学』, 212p., 東京, 古今書店
- 小畑弘己 2003「シベリア・沿海州」『季刊考古学』83: 80-84
- 小畑弘己 2004「シベリア・極東地域の初期土器研究について」『考古学ジャーナル』519: 15-20
- 小畑弘己 2009「東北アジアの土器の出現」「ロシア極東の初期の土器」『縄文はいつから!?ー1万5千年前になにがおこったのかー』, p.25, 千葉, 国立歴史民俗博物館
- オクラードニコフ A. П.・メドヴェージェフ B. E. 1990「アムール河下流, ガーシャ多層位集落遺跡の研究」(清水睦夫・村上恭通訳)『古代文化』42: 280-285.
- 梶原 洋 1998「なぜ人類は土器を使いはじめたのかー東北アジアの土器の起源ー」『科学』68-4: 296-304.
- 加藤博文 1998「1. 調査の目的と経緯」『北東アジアにおける新石器文化の変遷と多様性の研究 平成9年度高梨学術奨励基金研究助成研究成果報告書』, pp.1-2, 茨城, 筑波大学大学院地域研究研究科
- 加藤博文 2006「アムールランドにおける新石器文化の成立過程ー縄文文化の成立を考えるための比較資料としてー」『東アジアにおける新石器文化と日本』III, pp.117-133, 東京, 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター
- 加藤博文・赤井文人 2003「ハバロフスク州オシノバヤ・レーチカ 10 遺跡調査報告」『第4回北アジア調査研究報告会』, pp.11-14, 札幌, 北アジア調査報告会実行委員会.
- 加藤博文・石井 淳 1998「アムール川下流域における考古学調査報告(1997年度)」『筑波大学先史学・考古学研究』9: 57-96.
- 加藤博文・Shevkomud I.Ya.・山田昌久・川口武彦・長沼正樹 2003「アムール下流ゴールィ・ムイス4遺跡における上部旧石器石器群の調査」『北海道旧石器文化研究』8: 1-7.
- Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Onuki, S., Yamahara, T. Matsuzaki, H. 2013 Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the early Neolithic period in Northeast Asia. Radiocarbon 55: 1334-1340.
- 國木田 大・松崎浩之 2016「2013年オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.1ーオシノヴァヤレーチカ 12 遺跡(2010年)およびオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡(2012-2013年)発掘調査報告書ー』, pp.78-80, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 國木田 大・吉田邦夫・松崎浩之 2017「2004年ノヴォトロイツコエ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2ーノヴォトロイツコエ 10 遺跡(2003-2004年)発掘調査報告書ー』(本報告), pp.80-82, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 栗島義明 1999「神子柴文化の系統問題ーニーナ論文に寄せてー」『土曜考古』23: 157-170.
- シェフカムート, イーゴリ・ヤコブレビッチ 1997「極東・沿海州の土器の起源ーゴンチャールカ 1 遺跡の発掘調査ー」(梶原洋訳・解説)『考古学研究』44-3: 102-117
- シェフコムード I.Y.・長沼正樹・村上 昇 2004「ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 2003年発掘調査」『第5回北アジア調査研究報告会発表要旨』, pp.38-39, 札幌, 北アジア調査研究報告会実行委員会

- 白岩孝之 2011『魚附林の地球環境学—親潮・オホーツク海を育むアムール川』, 226p., 京都, 昭和堂
- 永広昌之 2003『日本海拡大前の東アジアの地体構造の復元』平成13～14年度科学研究費助成金基盤研究(B)(海外研究)研究成果報告書, 11p., 仙台
- 高原 光 2011「日本列島とその周辺域における最終間氷期以降の植生史」『シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史6: 環境史をとらえる技法』湯本貴和編, pp.15-43, 東京, 文一総合出版
- 竹原明秀 2005「シベリア・極東ロシアの植生概観」『シベリアにおける最終氷期以降の気候と植生』平成13～平成15年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書, pp.25-37, 京都
- 田中英司 2004『石器実測法—情報を描く技術—』, 87p., 東京, 雄山閣
- デレビャンコ A. P.・メドヴェージェフ V. E. 1995「極東における最も古い土器センターの一つとしてのアムール河流域」『国際シンポジウム東アジア・極東の土器の起源—縄文文化の起源を探る—予稿集』, pp.11-25, 仙台, 東北福祉大学
- 長沼正樹 2004「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本』I, pp.129-139, 東京, 國學院大學21世紀COEプログラム
- 長沼正樹 2010「アムール下流域のオシボフカ文化」『北東アジアの歴史と文化』菊池俊彦編, pp.55-69, 札幌, 北海道大学出版会
- 長沼正樹・シェフコムード I.Ya.・工藤雄一郎・コスチナ S.F.・松本 拓・ガルシコフ M.V.・橋詰 潤 2003「ゴンチャルカ1遺跡2001年発掘調査の概要とその諸問題」『旧石器考古学』64: 73-82.
- 長沼正樹・I.Ya.Shevkomud・M.V.Gorshkov・S.F.Kosityna・村上 昇・松本 拓 2005「ノヴォトロイツコエ10遺跡発掘調査概報」『北海道旧石器文化研究』10: 117-124.
- 長沼正樹・I.Ya.シェフコムード・松本 拓・M.V.ガルシコフ・村上 昇・國木田 大・S.F.コスイーツィナ・尾田好識 2005「ノヴォトロイツコエ10遺跡2004年発掘調査」『第6回北アジア調査研究報告会発表要旨』, pp.30-31, 札幌, 北アジア調査研究報告会実行委員会
- 橋詰 潤 2017「年代測定に関するコメント」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2—ノヴォトロイツコエ10遺跡(2003-2004年)発掘調査報告書—』(本報告), pp.83-85, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 橋詰 潤・シェフコムード, I. Ya.・内田和典編 2016『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 vol.1: オシノヴァヤレーチカ12遺跡(2010年)およびオシノヴァヤレーチカ10遺跡(2012-2013年)発掘調査報告書』, 112p. + 20 plates, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 橋詰 潤・シェフコムード, I. Ya.・内田和典編 2017『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2—ノヴォトロイツコエ10遺跡(2003-2004年)発掘調査報告書—』(本報告), 98p. + 13 plates, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 福田正宏・シェフコムード I.・高橋 健・コシツェナ S.・ゴルシュコフ M.・木山克彦 2005「II ゴールィムイス1遺跡発掘調査報告」『アムール下流域における新石器時代から初期鉄器時代への文化変容についての研究— ゴールィムイス1遺跡における発掘調査とその成果の報告—』福田正宏・シェフコムード I.Ya 編, pp.5-60, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究所実習施設
- 村上 昇 2017「土器」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2—ノヴォトロイツコエ10遺跡(2003-2004年)発掘調査報告書—』(本報告), pp.38-48, 長野, 明治大学黒耀石研究センター

(露語)

- Дервянко, А. П. 1983 Палеолит Дальнего Востока и Кореи, 216с., Новосибирск, Наука.
- Дервянко, А. П., Медведев, В. Е. 1992 Исследование поселения Гася (общие сведения, предварительные результаты, 1975 г.), 29 с., Новосибирск, Изд - во ИАЭТ СО РАН.
- Дервянко, А. П., Медведев, В. Е. 1993 Исследование поселения Гася (Предварительные Результаты, 1980 г.), 109 с., Новосибирск,

Изд - во ИАЭт СО РАН .

- Дервянко , А . П . , Медведев , В . Е . 1994 Исследование поселения Гася (Предварительные Результаты , 1986-1987 г . г .), 95 с . , Новосибирск , Изд - во ИАЭт СО РАН .
- Махинов , А . Н . 2006 Современное рельефообразование в условиях аллювиальной аккумуляции Владивосток , 232 с . , Владивосток , Дальнаука .
- Малявин А . В . , Шевкомуд И . Я . 1999 Предварительное сообщение об исследованиях новых стоянок с древнейшей керамикой в приамурье : Гончарка -3 и Новотроицкое -3. Project Amur, с .36-53, Tsukuba, Masters Program in Area Studies University of Tsukuba.
- Медведев , В . Е . 1995 К проблеме начального и раннего неолита на Нижнем Амуре . Обзорные результаты полевых и лабораторных исследований археологов , этнографов и антропологов Сибири и Дальнего Востока в 1993 г . : 228-237.
- Окладников , А . П . 1980 О работах археологического отряда амурской комплексной экспедиции в низовьях амурского моря летом 1935 г . Источники по археологии Северной Азии (1935-1976 гг .), с . 3-52, Новосибирск , Наука .
- Окладников , А . П . , Дервянко , А . П . 1973 Далекое прошлое Приморья и Приамурья , 440 с . , Владивосток , ДКИ .
- Шевкомуд , И . Я . 1998 Керамика начального неолита Приамурья . Россия и АТР 1: 80-89.
- Шевкомуд , И . Я . 2003 Осиновая Речка -10 – новый памятник переходного периода от палеолита к неолиту на Нижнем Амуре . Археология и социокультурная антропология Дальнего Востока и сопредельных территорий , с . 63-70, Благовещенск , БГПУ .
- Шевкомуд И . Я . 2004а Поздний Неолит Нижнего Амурского моря , 156 с . , Владивосток , Дальневосточное отделение РАН .
- Шевкомуд И . Я . 2004б Предварительные результаты полевых исследований стоянки Осиновая Речка -16 (Приамурье) . Четвертые Гродековские чтения : Материалы регион . науч . - практ . конф . « Приамурье в историко - культурном и естественно - научном контексте России » Ч .2, с .194-197, Хабаровск , ХККМ .
- Шевкомуд И . Я . и Като Х . 1999 Отчёт о совместных исследованиях поселения Кольчём -3 на озере Удыль (Нижний Амур) в 1998 г . , 3-35 с . , Н.Кato, M.Yamada, I.Ya.Shevkomud (eds.) Project Amur. Master ' s Program in Area Studies, University of Tsukuba. Tsukuba (Japan)
- Шевкомуд И . Я . и Като Х . 2002 Верхнепалеолитический комплекс стоянки Голый Мыс -4. Записки Гродековского музея 3:7-20.
- Шевкомуд , И . Я . и Кузьмин , Я . В . 2009 Хронология каменного века Нижнего Приамурья (Дальний Восток России) . Культурная хронология и другие проблемы в исследованиях древностей Востока Азии , с . 7-46, Хабаровск , ХККМ .
- Шевкомуд , И . Я . и Яншина , О . В . 2010 Начало неолита в Приамурье : осиповская культура . Международный симпозиум « Первоначальное освоение человеком континентальной и островной части Северо - Восточной Азии » . (Южно - Сахалинск , 18-25 сентября 2010 г .). с .118-134, Южно - Сахалинск , СахГУ .
- Шевкомуд , И . Я . и Яншина , О . В . 2012 Начало неолита в Приамурье : поселение Гончарка -1. 270 с . , Санкт - Петербург , МАЭ РАН .
- Шевкомуд И . Я . , Горшков М . В . , Косицына С . Ф . 2004а Предварительные результаты полевых археологических исследований стоянок Гончарка -1 и Новотроицкое -3 в 2002-2003 гг . Четвертые Гродековские чтения . Документы и пленарные доклады регион . науч . - практ . конф . « Приамурье в историко - культурном и естественно - научном контексте России » , с.57-62, Хабаровск , ХККМ .
- Шевкомуд И . Я . , Чернюк А . В . , Кузьмин Я . В . 2001 Стратиграфия , хронология , палеогеографическая реконструкция обстановки финального плейстоцена - голоцена Хехцирского геологического района . Четвертичные отложения юга Дальнего Востока и сопредельных территорий , с .107-111, Хабаровск .
- Шевкомуд И . Я . , Фукуда М . , Косицына С . Ф . , Горшков М . В . , Такахаси К . 2004б Предварительные результаты полевых археологических исследований стоянки Новотроицкое -3 в 2002-2003 гг . Четвертые Гродековские Чтения , с .213-220, Хабаровск , ХККМ .
- Шевкомуд И . Я . , Косицына С . Ф . , Горшков М . В . 2002 Результаты полевых археологических исследований стоянки Амурского моря -2 в г . Хабаровске . Записки Гродековского музея 3: 31-35.

(英語)

- Bazarova, V. B. 2008 Late Pleistocene and Holocene climate and vegetation changes in the Lower Amur River basin (Russian Far East). International Symposium on Human Ecosystem Changes in the Northern Circum Japan Sea Area (NCJSA) in Late Pleistocene. pp.10-20. The University of Tokyo, Tokyo.
- Kato H., Yamada M., Shevkomud I.Ya. (eds.)1999 Project Amur. pp.1-90. Project "Amur" Research Group. Master's Program in Area Studies, University of Tsukuba, Tsukuba.
- Kuzmin, Y.V., Shevkomud, I.Y. 2003 The Paleolithic-Neolithic cultural complexes from The Russian Far East. Journal of East Asian Archaeology. Vol.3 (3-4): 227-253.
- Morisaki, K., Sato, H. 2015 Hunter-gatherer responses to abrupt environmental change from the terminal Pleistocene to the early Holocene in the Lower Amur region. Sazerolova, S., Novak, M., Mizerova, A. eds. Forgotten times and spaces: New perspectives in paleoanthropological, paleoetnological studies. pp.418-434, Institute of Archaeology of the Czech Academy of Science and Masaryk University, Czech.
- Shimazu M., Kawano Y. 1999 Petrochemistry and technical setting of the Tertiary volcanic rocks from North Sikhote Alin. Journal of Mineralogy, Petrology and Economic Geology 94: 145-161.

5. 考察

5-1 2004年ノヴォトロイツコエ10遺跡出土試料の放射性炭素年代測定

國木田 大・吉田邦夫・松崎浩之

5-1-1 はじめに

本稿では、2004年ノヴォトロイツコエ10遺跡出土試料の放射性炭素年代測定に関して報告を行う。本試料は、2004年9月に実施された調査試料で（長沼ほか2005）、筆者が直接試料採取を行った。これまでに筆者らは、オシポフカ文化の年代に関して、ゴンチャルカ1遺跡（Kunikita et al. 2013; 2014a）、オシノヴァヤレーチカ10遺跡（國木田・松崎2016）等の測定を行ってきた。ノヴォトロイツコエ10遺跡に関しては、土器付着物2点を本稿に先行して発表している（Kunikita et al. 2013）。また、関連するアムール川中流域のグロマトゥーハ遺跡等の年代測定も検討を進めている最中であり、一部に関しては報告を行っている（Kunikita et al. 2014b）。

5-1-2 測定試料と分析方法

測定試料は、2004年ノヴォトロイツコエ10遺跡出土炭化物17点、土器付着物2点の計19点である（Table 5-1-1）。調査では148点の炭化物を記録採取し、その内、状態やコンテクストの良好な試料の分析を行った。放射性炭素年代測定における試料調製は、通常の方法にしたがって行った（吉田2004）。化学処理におけるアルカリ処理濃度は、試料が全て溶解しない程度にとどめた。試料の化学処理収率等をTable 5-1-3に示している。本報告での暦年較正年代値は、IntCal13を用いてOxCal v4.2.4（Bronk Ramsey 2013）にて較正した（Table 5-1-2）。年代測定は、東京大学総合研究博物館のタンデム加速器（MALT ; Micro Analysis Laboratory, Tandem accelerator）を用いた。土器付着物の炭素・窒素同位体比の測定は、安定同位体比質量分析計 DELTA V（Thermo Fisher Scientific 社製、SIサイエンス株式会社）を用いた。

5-1-3 測定結果

測定結果をTable 5-1-2に示した。炭化物2点（No.77, 94）は、11～14世紀の年代であり、初期新石器時代の所産ではなかった。その他の炭化物15点の年代値は、12,090～10,970¹⁴C yr BP（14,044～12,736 cal yr BP, 1 σ ）の範囲で得られた。土器付着物2点も11,250¹⁴C yr BPと11,620¹⁴C yr BPで、炭化物と同年代であった。大部分の年代が11,000BP代前半であるため、約13,000 cal yr BPが分布の中心であると思われる。これらの年代値は、ゴンチャルカ1遺跡の土器付着物（11,650～10,060¹⁴C yr BP, 13,550～11,405 cal yr BP, 1 σ ）、オシノヴァヤレーチカ10遺跡の炭化物（11,150～10,930¹⁴C yr BP, 13,094～12,952 cal yr BP, 1 σ ）とほぼ同年代である。

5-1-4 おわりに

本稿では、2004年ノヴォトロイツコエ10遺跡出土試料の放射性炭素年代測定結果を報告した。年代値は、12,090～10,970¹⁴C yr BP（14,044～12,736 cal yr BP, 1 σ ）であり、これまでのオシポフカ文化の年代範囲と整合的であった。本遺跡の年代測定は、今後も土器付着物などを継続して行う予定である。

Table 5-1 Excavated situation of the samples

	Sample nr	Material	Excavated nr
1	04HTP10-67	charcoal	Sector 2, G-4, hearth 2, GL=-1.634 m
2	04HTP10-68	charcoal	Sector 2, G-4, hearth 2, GL=-1.634 m
3	04HTP10-76	charcoal	Sector 2, H-2, Layer 4, Prast 6, GL=-1.215 m
4	04HTP10-77	charcoal	Sector 2, G-3, Layer 4, Prast 6, GL=-1.309 m
5	04HTP10-84	charcoal	Sector 1, E-4, Layer 4, GL=-1.330 m
6	04HTP10-94	charcoal	Sector 2, H-4, Layer 4, Prast 7, GL=-1.651 m
7	04HTP10-100	charcoal	Sector 1, C-3, Layer 4, Prast 7, GL=-1.147 m
8	04HTP10-108	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 8, GL=-1.165 m
9	04HTP10-109	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 8, GL=-1.176 m
10	04HTP10-110	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 8, GL=-1.158 m
11	04HTP10-111	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 8, GL=-1.145 m
12	04HTP10-112	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 8, GL=-1.152 m
13	04HTP10-126	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 4-5, Prast 8, GL=-1.152 m
14	04HTP10-128	charcoal	Sector 1, E-1, Layer 4, Prast 6, GL=-0.937 m
15	04HTP10-141	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 4-5, Prast 8, GL=-1.185 m
16	04HTP10-142	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 4-5, Prast 8, GL=-1.182 m
17	04HTP10-148	charcoal	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 10, GL=-1.158 m
18	Novotroitskoe10-P1	charred remain on pottery (inner)	Sector 2, G-5-6, Layer 3, Prast 4, S.K.N2, GL=-1.651 m
19	Novotroitskoe10-P2	charred remain on pottery (inner)	Sector 1, C-2, Layer 5, Prast 10, N2

引用文献

Bronk Ramsey 2013 OxCal v4.2.4

Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Onuki, S., Yamahara, T., Matsuzaki, H. 2013 Dating charred Remains on Pottery and analyzing food habits in the Early Neolithic period in Northeast Asia. Radiocarbon 55 (2-3) : 1334-1340.

Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Matsuzaki, H. 2014a 「Radiocarbon dates of charred remains on pottery and analyzing food habits of the Osipovka culture, Russian Far East」『環日本海北回廊の考古学的研究（I）－ヤミフタ遺跡発掘調査報告書－』, pp.108-113, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

Kunikita, D., Nesterov, S.P., Yoshida, K., Matsuzaki, H., Onuki, S. 2014b 「Radiocarbon dates of charred remains on pottery of the Gromatukha site」『環日本海北回廊の考古学的研究（I）－ヤミフタ遺跡発掘調査報告書－』, pp.114-116, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

國木田 大・松崎浩之 2016 「2013年オシノヴァヤレーチカ 10遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期におけるアムール川流域における環境変動と人類行動 Vol.1』, pp.78-80, 長野, 明治大学黒耀石研究センター

長沼正樹・I.Ya. シェフコムード・松本 拓・M.V. ガルシコフ・村上 昇・國木田 大・S.F. コスィーチナ・尾田好識 2005 「ノヴォトロイツコエ 10遺跡 2004年発掘調査」『第6回北アジア調査研究報告会』, pp.30-31, 東京, 北アジア調査研究報告会実行委員会

橋詰 潤 2016 「東アジアにおける土器出現期とオシノヴァヤレーチカ遺跡群の発掘調査成果」『更新世末期におけるアムール川流域における環境変動と人類行動 Vol.1』, pp.84-95, 長野, 明治大学黒耀石研究センター

吉田邦夫 2004 「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」新潟県立歴史博物館編『火炎土器の研究』, pp.17-36, 東京, 同成社

Table 5-2 ¹⁴C and calibrated ages of the samples

	Sample nr	¹⁴ C age (BP)	Calibrated age (calBP, 1 σ)	Lab.No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	C/N ratio
1	04HTP10-67	11,200 \pm 70	13,137-13,009 (68.2%)	TKa-13603	-25.1		
2	04HTP10-68	10,970 \pm 70	12,906-12,736 (68.2%)	TKa-13604	-25.4		
3	04HTP10-76	11,790 \pm 60	13,717-13,561 (68.2%)	TKa-13574	-26.6		
4	04HTP10-77	950 \pm 30	923-900 (19.5%), 867-824 (36.6%), 815-800 (12.1%)	TKa-13575	-25.6		
5	04HTP10-84	11,300 \pm 70	13,219-13,088 (68.2%)	TKa-13605	-23.2		
6	04HTP10-94	680 \pm 35	674-645 (42.3%), 587-566 (25.9%)	TKa-13606	-24.9		
7	04HTP10-100	11,020 \pm 60	12,973-12,799 (68.2%)	TKa-13607	-25.0		
8	04HTP10-108	11,540 \pm 50	13,429-13,321 (68.2%)	TKa-13576	-22.7		
9	04HTP10-109	11,190 \pm 60	13,115-13,006 (68.2%)	TKa-13577	-23.9		
10	04HTP10-110	11,490 \pm 50	13,400-13,285 (68.2%)	TKa-13578	-22.6		
11	04HTP10-111	11,390 \pm 60	13,285-13,157 (68.2%)	TKa-13579	-25.4		
12	04HTP10-112	11,320 \pm 50	13,221-13,108 (68.2%)	TKa-13580	-23.4		
13	04HTP10-126	11,370 \pm 70	13,280-13,140 (68.2%)	TKa-13608	-25.2		
14	04HTP10-128	11,300 \pm 70	13,218-13,089 (68.2%)	TKa-13609	-26.9		
15	04HTP10-141	12,090 \pm 70	14,044-13,827 (68.2%)	TKa-13610	-24.3		
16	04HTP10-142	11,330 \pm 70	13,250-13,116 (68.2%)	TKa-13611	-25.9		
17	04HTP10-148	11,210 \pm 60	13,130-13,023 (68.2%)	TKa-13581	-25.1		
18	Novotroitskoe10-P1	11,250 \pm 80	12,134-11,813 (68.2%)	TKa-15005	-27.1	12.8	8.8
19	Novotroitskoe10-P2	11,620 \pm 70	13,544-13,512 (10.8%), 13,495-13,380 (57.4%)	TKa-15006	-25.2	11.1	7.2

* $\delta^{13}\text{C}$: No.1-17, AMS measurement
 No.18-19, Stable isotope mass spectrometry

Table 5-3 Results of the chemical treatment

	Sample nr	Amount used (mg)	After AAA (mg)	After AAA (%)	Amount oxidation (mg)	CO ₂ amount (mg)	CO ₂ yield (%)
1	04HTP10-67	30.5	10.8	35.2	2.4	1.6	64.5
2	04HTP10-68	21.0	5.8	27.7	2.5	1.5	59.8
3	04HTP10-76	43.2	26.0	60.2	3.4	2.2	63.8
4	04HTP10-77	19.5	8.6	44.4	3.1	1.9	61.0
5	04HTP10-84	19.6	11.8	60.4	2.8	1.8	64.5
6	04HTP10-94	46.6	20.8	44.5	2.4	1.4	58.8
7	04HTP10-100	16.1	1.7	10.5	1.4	0.8	62.1
8	04HTP10-108	21.2	2.8	13.1	1.9	1.2	61.7
9	04HTP10-109	20.6	7.3	35.3	2.3	1.4	60.9
10	04HTP10-110	39.0	16.8	43.0	2.6	1.8	68.3
11	04HTP10-111	15.0	2.6	17.2	2.0	1.0	50.2
12	04HTP10-112	27.1	8.2	30.2	2.9	1.8	62.3
13	04HTP10-126	15.3	3.4	22.4	1.8	1.1	63.0
14	04HTP10-128	26.9	14.0	52.0	2.9	2.0	69.5
15	04HTP10-141	30.4	12.8	42.0	2.4	1.4	57.5
16	04HTP10-142	27.0	3.3	12.1	2.0	1.3	65.1
17	04HTP10-148	29.4	11.6	39.4	2.4	1.5	62.2
18	Novotroitskoe10-P1	38.5	20.9	54.3	4.2	1.0	23.5
19	Novotroitskoe10-P2	16.7	8.1	48.8	1.9	0.4	23.3

5-2 年代測定に関するコメント

橋詰 潤

5-2-1 オシポフカ文化期の年代測定値

オシポフカ文化期の遺物を出土する遺跡において採取された試料の測定に基づいて、これまでに蓄積された年代測定値（本報告第2章の Table 2-1 参照）は、極端に古いものや新しい年代値を除外すると、現時点で最古の測定例がガーシャ遺跡 1992 年調査時採取試料の $13,260 \pm 100$ ^{14}C yr BP (AA-13391) である。一方、最も新しい測定値はゴンチャルカ 1 遺跡の 1995 年調査時採取試料の 9890 ± 230 ^{14}C yr BP (Gak-18981) である。上記の年代測定値に基づくと、オシポフカ文化は概ね 15,500-11,400 cal yr BP の範囲に較正年代の中央値が収まる¹⁾。こうした年代測定値に基づいた判断が可能であるならば、オシポフカ文化は晩氷期前半の顕著な温暖化をさらに遡る時期から、完新世初頭にかけて存続していたと推定することができる（本報告第2章の Fig.2-5 参照）。

5-2-2 國木田ほか（2017）報告の、年代測定試料の採取状況

今回、國木田ほか（2017）により、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡（以下、本遺跡と略称）2004 年度調査時に採取された計 19 点（炭化物 17 点、土器付着炭化物 2 点）の年代測定結果が報告された。本遺跡出土の炭化物の平面分布は Fig.3-5 の通りだが、ナンバーが表示されているのが、今回年代測定がおこなわれた試料の出土地点を示している。これらのナンバーは Table 5-1 の「Sample nor」の列に記載された各試料 No. の末尾の数字（例えば、04HTP10-67 の 67）に対応している。2004 年の調査では 148 点が國木田自身の手でサンプリングされ、特に状態やコンテキストの良好な試料について年代測定がおこなわれた。年代測定がおこなわれた炭化物を平面分布で見ると、C-2 グリッドから採取されたものが最も多く、1 号くぼみ地形の範囲内である E-4 グリッドから採取された測定番号 5（04HTP10-84）を除き、1 号くぼみ地形の周辺から採取されている。出土層位では 4 層～5 層のものが多い（1 号くぼみ地形の範囲については Fig.3-4 および Fig.3-6 を参照）。

なお、國木田ほか（2017）および Kunikita et al.（2013）で年代測定値が報告された土器内面付着炭化物は、Table 5-1 の測定番号 18（Nobotoroitskoe10-P1）が Fig.3-9-1 の 13 と 14（PL.12 の 13・14）に、測定番号 19（Nobotoroitskoe10-P2）が Fig.3-9-2 の 44（PL.13 の 44）から採取されている。測定番号 18 のうち Fig.3-9-1 の 13 の口縁部破片は G-5・6 グリッド 3 層から出土し、村上（2017）で器壁の厚さが 1 cm を超える厚手の土器として 1 類に分類されている。測定番号 19 は C-2 グリッド 5 層から出土し、外面に刺突・押圧列が 2 段めぐり上段には穿孔も認められ、内面には横方向の条痕が観察される。村上（2017）では、器壁の厚さが 5～6 mm 程度で、口縁部外面を面取りするもののうち、穿孔を持つ 4a 類に分類されている。

5-2-3 年代測定結果の評価について

本遺跡出土試料 19 点のうち、測定番号 4 と 6 は 11 世紀～14 世紀の年代を示し、オシポフカ文化期の年代値とは大きく異なっている。そのほかの 15 点の炭化物からは、 $12,090 \sim 10,970$ ^{14}C yr BP（ $14,044 \sim 12,7736$ cal yr BP, 1σ ）の範囲の年代値が得られた（國木田ほか 2017）。土器 2 点から得られた付着炭化物からは、 $11,250 \pm 80$ ^{14}C yr BP（ $12,134 \sim 11,813$ cal yr BP, 1σ ）と $11,620 \pm 70$ ^{14}C yr BP（ $13,495 \sim 13,380$ cal yr BP, 1σ ）の年代値が得られており、炭化物から得られた年代値と大きく変わらない（國木

田ほか 2017)。特に、炭化物の年代値は新しい年代値を示した測定番号 4, 6 と測定番号 15 (12,090 ± 70 ¹⁴C yr BP, 14,044 ~ 13,827 cal yr BP, 1 σ) を除いた大部分が, 11,000 ¹⁴C yr BP 代前半あるいはそれに近い
ため, 較正年代も約 13,000 cal yrBP が分布の中心であると推定されている (國木田 2017)。この年代値は,
國木田・松崎 (2016) で報告されたオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の年代値 (11,150 ~ 10,930 ¹⁴C yr BP,
13,094 ~ 12,952 cal yr BP, 1 σ) に非常に近い。

本遺跡で得られた年代値には 11 世紀 ~ 14 世紀の年代値を示すものが含まれる。ただし, この年代値に
相当する人工遺物は出土していない。また, 多くの年代値は 13,000 cal yrBP を分布の中心としている。こ
の年代値は, 先述のとおりオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡での年代測定結果 (國木田・松崎 2016) に非常
に近い。さらに, 両遺跡共に両面加工の石器を中心とし, 湧別技法類似の技術による細石刃石器群とより
簡略化された細石刃剥離技術, 加えて石鏃や磨石, 石錘が出土するなどといった共通した石器の様相から,
両遺跡間に類似性を認めることが可能である。上記から, これまでに得られた年代が採用可能であり, さ
らにオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡と本遺跡の石器群に類似性を認めることができると仮定すると, 両遺
跡は晩氷期のベーリング/アレレード期に対比対応可能な顕著な温暖化の終了直前から, ヤンガードリア
ス期に対比可能な寒の戻りが想定される時期の始まり頃に位置づけられる可能性がある (両遺跡が位置付
けられる可能性のある大まかな年代的位置や, 古気候変動との対応関係については, Fig.2-5 の上段左の図
を参照)。

なお, 本遺跡では出土石器についてオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡との類似性を指摘した (本報告第 4
章「成果と課題」および, Fig.4-1, Table 4-1 参照) が, 主要な使用石材が, 本遺跡では暗灰色の堆積岩,
オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡では緑灰色の堆積岩である (橋詰ほか編 2016) などといった相違がある。
さらに, 村上 (2017) で指摘されているように, 本遺跡出土土器はオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡に比べ
てヴァラエティが豊富である。本遺跡の位置づけには, こうした点も加味した検討をさらに続ける必要が
ある。こうした今後の課題に関連して, 今回の報告に先立って 2016 年 12 月におこなった本遺跡の資料調
査において, 炭化物が付着する土器を新た抽出することができた。今後, 新たに炭化物の採取をおこない,
年代測定例を新たに追加することができるものと期待される。さらに, 測定された年代と試料採取がなさ
れた土器の型式学的検討を突き合わせることで, さらに議論を深めることが可能になるものと期待できる。
こうした結果と, 特に土器などの出土資料との関係をさらに議論し, 本遺跡出土資料の位置付けについて,
2019 年 3 月刊行予定のオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 2015 年調査の報告を含む, 最終報告においてさら
なる考察をおこなう予定である。

註

1) 較正年代値の算出には, OxCal ver.4. 2. 4 (Bronk Ramsey and Lee 2013) を用い, IntCal 13 (Reimer et al. 2013) を利用した。

引用文献

Bronk Ramsey, C. and Lee, S. 2013 Recent and planned developments of the program OxCal. Radiocarbon 55: 720-730.

橋詰 潤・シェフコムード, I. Ya.・内田和典編 2016『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 vol.1: オシノヴァ
ヤレーチカ 12 遺跡 (2010 年) およびオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 (2012-2013 年) 発掘調査報告書』, 112p. + 20 plates, 長野,
明治大学黒耀石研究センター

Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Onuki, S., Yamahara, T. 2013 Dating charred remains on pottery and analyzing food habits in the early
Neolithic period in northeast Asia. Radiocarbon 55: 1334-1340.

- 國木田 大・松崎浩之 2016 「2013 年オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.1—オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡 (2010 年) およびオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 (2012-2013 年) 発掘調査報告書—』, pp.78-80, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 國木田 大・吉田邦夫・松崎浩之 2017 「2004 年ノヴォトロイツコエ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2—ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003-2004 年) 発掘調査報告書—』 (本報告), pp.80-82, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 村上 昇 2017 「土器」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2—ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003-2004 年) 発掘調査報告書—』 (本報告), pp.38-48, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon 55: 1869 -1887.

5-3 オシポフカ文化と縄文時代草創期の土器の比較検討 — 縄文土器大陸起源論を念頭に —

村上 昇

5-3-1 はじめに

更新世終末の東北アジアでは、アムール川の中流域や下流域などのロシア連邦極東地域、中国北部、そして日本列島において土器の使用が始まる。ほぼ同時期に隣接する地域で土器の使用が始まるため、当該期の土器を研究対象とする場合、おのずとそれぞれの土器の出自—各地域独自で土器が生み出されたのか、あるいは伝播により土器が普及したのか—に関心が集まる。中でも、縄文土器については、研究史上、その起源をアジア大陸に求める見解が古くから見られる。この縄文土器大陸起源論とでも言うべき見解は、実際の資料に即した比較検討が十分ではないにも関わらず、今日まで根強く残っている。仮に、縄文土器の起源を大陸に求めるならば、陸路によるヒトの移動の可能性が残るアムール川下流域の土器、つまりオシポフカ文化の土器がその最有力候補の一つになる。

そこで、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡出土資料を踏まえ、オシポフカ文化の土器と縄文時代草創期土器とを比較し、両者の直接的系譜関係の有無について検討する。

5-3-2 縄文土器大陸起源論の概略

資料の比較検討の前に、縄文土器研究における縄文土器大陸起源論について、その概略をまとめる。

縄文土器起源論の萌芽は、1920年代に遡る。当時は、縄文土器研究が人種民族論から脱却し始め、「最古の縄文土器」の起源を大陸に求める論が散見されるようになる（浜田 1929; 大場 1933, 1935）。同じ頃、山内清男は縄文土器の編年を5期に大別区分するとともに（山内 1932a, 1932b）、縄文文化と縄文土器はアジア大陸からの文化伝播により日本列島に伝わったと主張する（山内 1929a, 1929b, 1930a, 1930b, 1932a, 1932b, 1935a, 1935b）。山内が縄文文化と縄文土器が大陸から伝播したとした根拠は、第1に、縄文時代初頭を除き、大陸との交渉を示す痕跡が稀薄であること、第2に、孤立していたとはいえ、自生でないとするれば、当時、日本列島で最古の考古文化とされた縄文文化の由来は必要とされたことである。当時、日本列島最古の人類の活動痕跡は縄文時代初頭のものであった。そのため、大陸からの土器の伝播から縄文文化の起源を探ろうとする発想が生まれたのは、ごく自然な流れであったと言えよう。江坂輝弥と白崎高保の縄文土器南北二系統論も、その文脈で読み取ることが可能である（江坂 1942, 1944, 1948）。伝播系統論に基づく縄文土器・縄文文化の由来をアジア大陸に求める歴史観は、戦後も山内清男を中心に展開され、戦後の研究に大きな影響を与えることになる。

しかし、戦後～1950年代にかけて、縄文土器大陸起源論を取り巻く状況は大きく変化する。一つは、群馬県岩宿遺跡の発掘である。「縄文時代が日本列島最古の時代である」という前提が崩れ、縄文時代以前の日本列島に人類が生活していたことが広く認知されるようになった。これは、縄文時代より古い時期に、日本列島上で人類が生活していたことが明らかである以上、縄文文化の起源をアジア大陸からの文化伝播によって説明しなくてはならない必然性が失われたことを意味する。これ以降、縄文時代の始まりを考える上で、旧石器時代あるいは無土器時代・先土器時代の終末との関係が問題となる（芹沢 1947, 1959）。もう一つは、神奈川県夏島貝塚出土の炭化物の放射性炭素年代測定値の公表である（杉原 1959）。9,000 BP を遡る年代値は、当時知られていた世界各地の最古の土器群の年代を大幅に遡るものであった。

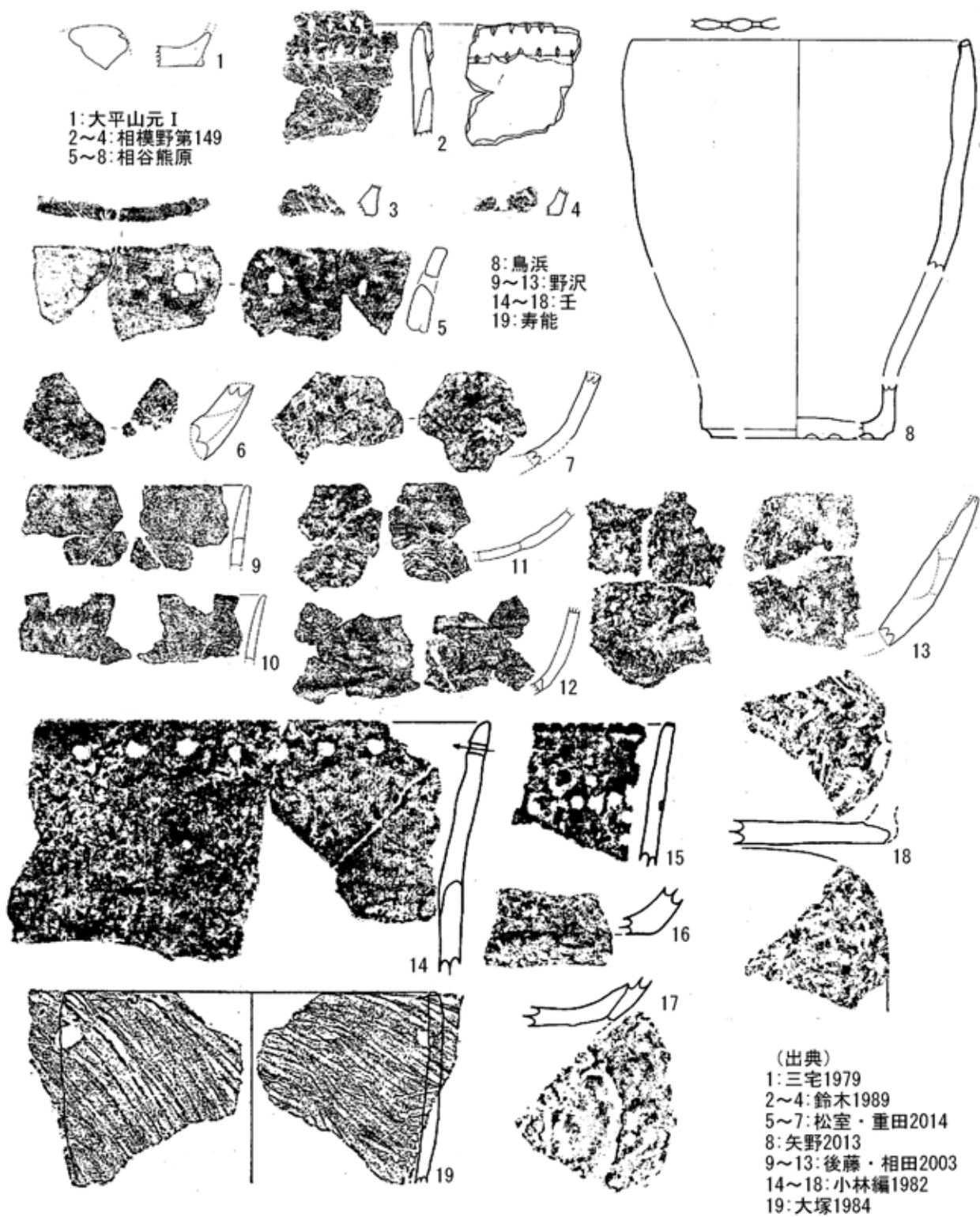


Fig.5-1 縄文時代草創期の土器

Fig.5-1 Incipient Jomon pottery

1960年代に縄文時代の年代や歴史的な位置付けを巡り山内清男と芹沢長介との間で繰り広げられた本ノ木論争は、これらの延長線上にある議論と言える。

その後、山内清男と佐藤達夫は、草創期を設定し、縄文土器編年を6期に区分する(山内・佐藤 1962, 1964; 山内 1964, 1969b)。その中で、山内は、土器から縄文文化の系譜を大陸に辿ることを断念し、石器組成から縄文文化の系譜を探ろうとする(山内・佐藤 1962)。その際、縄文時代初頭における日本列島とアジア大陸との併行関係を設定する根拠となったのが、渡来石器である。山内が挙げた渡来石器には、植刃、断面三角形の錐、半月形石器などがあるが(山内 1960, 1964, 1967a; 山内・佐藤 1962, 1964)、最終的に年代を絞り込む材料となったのは矢柄研磨器であった(山内 1967a, 1967b, 1968, 1969a, 1969b)。これにより、山内は、縄文時代の開始年代の上限をB.C.2,500年とし、草創期をオクラドニコフのバイカル編年キトイ期などに併行させている。

山内清男が土器から縄文文化の系譜を大陸に辿ることを断念した後も、縄文土器大陸起源論は根強く残った。研究者間に縄文文化の遡源を大陸に求める志向が根強く残っていたことは想像に難くないが、日本列島と大陸における資料の蓄積が進んだことも、その背景にあったと考えて良い。代表的なのは、佐藤達夫による新潟県小瀬が沢洞穴出土土器と沿海州ザイサノフカ I 遺跡と咸鏡北道羅津出土の窩紋土器・篋紋土器との対比である(佐藤 1971)。佐藤ほど直接的ではないが、大陸極東地域に縄文土器の系譜を辿る可能性を滲ませる見解が散見される(加藤 1988 など)。また、神子柴・長者久保石器群との類似性から、縄文文化の遡源を大陸極東地域に求める見解もある(栗島 1991)。その一方、近年は、縄文土器大陸起源論は慎重あるいは否定的な見解も多く(長沼 2003, 2004; 福田 2016 など)、東北アジア各地で多元的に土器が生み出されたと考える傾向が強い。

5-3-3 オシボフカ文化の土器と縄文時代草創期の土器との対比

両者の対比を、器形(底部形態)、成形技術、器面調整、加飾(文様)を通して行う。

1) 器形(底部形態)

土器の器形の内、底部形態は土器の成形過程を左右する、いわば土器製作技術体系の要である。先述のとおり、ノヴォトロイツコエ 10 遺跡から出土したものを含め、オシボフカ文化の土器は平底である蓋然性が高い。

一方、日本列島の出現期(縄文時代草創期)土器は、時期・地域により異なり、一様ではない。縄文時代草創期の初頭に位置付けられ、隆起線土器を遡る可能性がある土器については、資料の評価が分かれるものが多いため、比較の際には慎重さが求められる。器形に不明な点が多いが、平底片が散見される。青森県大平山元 I 遺跡からは、無文土器の平底片が出土している(三宅 1979)。神奈川県相模野 No. 149 遺跡出土の土器には、平底片が見られる(鈴木 1989)。次の隆起線土器群の時期は、九州と本州東部とでは器形が異なる。両地域の隆起線土器については、大塚達朗が施文時の土器の据え方の違いに起因する「土器扱い」の違いを指摘している(大塚 1990 ほか)。これに加え、底部形態も異なる。九州の隆起線土器は、長崎県泉福寺洞穴出土の豆粒文土器の印象が強いため丸底と思われるが、平底が基調である(村上 2005)。南九州の隆起線土器も同様である。これに対し、本州東部の隆起線土器は、丸底と尖底を基調とする。隆起線土器より後の土器群は、時期・地域により多様であり、様相が複雑である。新潟県域を中心に分布する円孔文土器は、底部形態が判然としない。新潟県壬遺跡では、平底の底部片と丸底になると思われる底部片が報告されている(小林編 1982)。爪形文土器は、本州では尖底、北部九州では丸底、南九州では平底が基調である。九州から関西にかけては無文土器が分布し、関西周辺のものには平底

になると考えられる（矢野 2013；松室・重田 2014）。ただし、形態差が激しいため、これら全て同一の土器群とは見做し難い。北関東には、山内清男が「浅縄紋土器」として設定した大谷寺 2 式が見られる（山内 1969b）。大谷寺 2 式の類例としては、栃木県野沢遺跡出土の「無文土器」と報告されている土器があり（後藤ほか編 2003）、底部は丸底と思われる。本州の広汎に分布する多縄文土器群は、初めは平底であるが、やがて丸底に変化する。

年代測定値を勘案せずに土器のみから両者を比較した場合、縄文土器の系譜をオシポフカ文化の土器に求める余地があるとすれば、平底の底部形態のものに限られよう。また、陸伝いの移動を想定するならば、大陸極東地域に比較的近い、日本列島の北東部に分布する土器に候補が限られよう。この 2 点の条件を満たす土器は、隆起線土器群を遡る可能性がある土器群と、多縄文土器群の 2 者に絞られる。しかしながら、後述する底部形態以外の要素では、オシポフカ文化の土器との差異が際立つ。

2) 成形技術

オシポフカ文化の土器が輪積み成形である蓋然性が高いことは、既に述べた。縄文時代草創期の土器群の大半も、同じく輪積み成形と筆者は判断する。しかしながら、細片が多いため、隆起線土器を遡る可能性がある土器などについては、明確な成形方法の復元が困難なものもある。その中であって、大平山元 I 遺跡出土土器で輪積み成形の可能性が示されている（谷口 1999）。輪積みによる成形という点は、両者に共通すると言えるだろう。

3) 器面調整

オシポフカ文化の土器は、器面調整に条痕調整を用いる特徴がある。これに対し、縄文時代草創期の土器においては、条痕調整あるいはハケメ調整は主流ではない。例外的に認められる条痕調整が施される土器としては、埼玉県寿能遺跡出土の土器（大塚 1984）などがある。寿能遺跡の土器は、植物の茎もしくは枝のようなもので条痕調整が施されており、オシポフカ文化の土器に見られるものとは異なる。また、隆起線土器の無文部など、器面を平滑に整える土器についても、条痕調整は認め難い。器面調整の技法については、両者は大きく異なる。

4) 加飾・文様

オシポフカ文化の土器における主要な加飾は、櫛歯状工具を押圧するものから押圧あるいは刺突列へと変化する。また、口縁部直下の押圧あるいは刺突列は、口縁部に広く配された複数条の押圧から、口縁部直下の円形刺突へと変化すると考えられる。この内、縄文時代草創期土器の文様との類似性が最も強いのは口縁部直下の円形刺突であり、新潟県域を中心に分布する円孔文土器の文様に類似する。両者は、施文部位や加飾の形状だけでなく、貫通するものと非貫通のものがある点も共通する。

しかしながら、両者は加飾・文様以外の相違点が著しい。オシポフカ文化の土器は、条痕調整を基本とするため、器面は平滑である。一方の円孔文土器は、特に内面に起伏が顕著に残る。指などによる搔き上げ調整によるものであり、オシポフカ文化の土器とは全く異なる。土器製作技術的には、円孔文土器の系譜をオシポフカ文化の土器に求めることは難しい。

5-3-4 おわりに

以上、オシポフカ文化の土器と縄文時代草創期の土器を比較すると、個別要素では類似性が認められるものの、総体としては差異が際立つ。大平山元 I 遺跡出土の無文土器のような隆起線土器群より古いとされる土器の遡源をオシポフカ文化の土器に求めるとしても、器面調整の差が大きく、両者の直接的な系譜関係は認め難い。円孔文土器のように加飾・文様が類似するものも、器面調整の差が問題となる。現時

点では、オシボフカ文化の土器に縄文土器の遡源を求めることは困難である。

今回は、土器の諸属性の内、器形（底部形態）、成形技術、器面調整、加飾（文様）に絞り、比較を行った。当該期の土器は小片が多く、全体像が判りづらいという制約があるためである。より詳細な比較をするためにも、まずは地域単位の土器編年研究を着実に進めることが求められる。

引用文献（50音順）

- 江坂輝弥 1942 「稲荷台文化の研究—東京市赤堤町新井遺蹟調査報告—」『古代文化』第13巻第8号
- 江坂輝弥 1944 「廻転押捺文の研究」『人類学雑誌』第59号第8号
- 江坂輝弥 1948 「廻転押捺文土器の研究（一）—特に稲荷台系捺糸文文化の研究—」『あんとろぼす』第9号
- 大塚達朗 1984 「縄文海進以前の遺物と出土状況」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—』埼玉県教育委員会
- 大塚達朗 1990 「隆線紋の比較から見た九州と本州—序章—」『縄文時代』第1号
- 大場磐雄 1933 「縄文式土器論の過去及び現在」『考古学雑誌』第23巻第1号
- 大場磐雄 1935 『考古学』建設社
- 加藤晋平 1988 『日本人はどこから来たか—東アジアの旧石器文化—』岩波書店
- 栗島義明 1991 「北からの新石器革命」『考古学ジャーナル』341
- 後藤信祐・相田 孝 2003 『野沢遺跡・野沢石塚遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 小林達雄編 1982 『壬遺跡 1982』國學院大學文学部考古学研究室
- 佐藤達夫 1971 「考古学講座③ 縄紋式土器研究の課題—特に草創期前半の編年について—」『日本歴史』第277号
- 杉原荘介 1959 「縄文文化初頭の夏島貝塚の土器」『科学読売』第11巻9月号
- 鈴木次郎 1989 『相模野第149遺跡』大和市教育委員会
- 芹沢長介 1947 「南関東に於ける早期縄紋式文化研究の展望」『あんとろぼす』第8号
- 芹沢長介 1959 「縄文土器の起源」『科学』vol.29 No.8
- 谷口康浩 1999 「長者久保文化期の諸問題」『大平山元 I 遺跡の考古学調査—旧石器文化の終末と縄文文化の起源に関する問題の探求—』大平山元 I 遺跡発掘調査団編
- 長沼正樹 2003 「更新世終末から完新世初頭における極東北部の両面調整石器群」『古代文化』第55巻第10号
- 長沼正樹 2004 「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本 I』國學院大學 21 世紀 COE プログラム基層文化としての神道・日本文化研究グループ考古学班
- 浜田耕作 1929 「日本の古代土器」『史前学雑誌』第1巻第4号
- 福田正宏 2016 「北東アジアにおける土器出現期と新石器化の構造変動」『日本列島における縄紋土器出現から成立期の年代と文化変化 発表要旨』中央大学（小林謙一）
- 松室孝樹・重田 勉 2014 『相谷熊原遺跡 I』滋賀県教育委員会・(公財)滋賀県文化財保護協会
- 三宅徹也 1979 「土器」『大平山元 I 遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館
- 村上 昇 2005 「南九州縄文草創期土器の底部についての覚書」『九州縄文時代早期研究ノート』第3号
- 矢野健一 2013 「近畿地方における縄文草創期の土器編年」『立命館大学考古学論集VI』立命館大学考古学論集刊行会
- 山内清男 1929a 「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号（山内清男 1997 『先史考古学論集』1 至人社 所収）
- 山内清男 1929b 「繊維土器について 追加第一」『史前学雑誌』第1巻第3号（『先史考古学論集』1 所収）
- 山内清男 1930a 「繊維土器について 追加第二」『史前学雑誌』第2巻第1号（『先史考古学論集』1 所収）
- 山内清男 1930b 「繊維土器について 追加第三」『史前学雑誌』第2巻第3号（『先史考古学論集』1 所収）
- 山内清男 1932a 「日本遠古之文化 I 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』第1巻第4号（『先史考古学論集』1 所収）

- 山内清男 1932b 「日本遠古之文化 II 縄紋土器の起源」『ドルメン』第1巻第5号 岡書院, 東京 (山内清男 1997『先史考古学論集』1 至人社 5-11頁, 東京, 所収)
- 山内清男 1935a 「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』第4巻第1号 (『先史考古学論集』1 所収)
- 山内清男 1935b 「縄紋式文化」『ドルメン』第4巻第6号 (『先史考古学論集』1 所収)
- 山内清男 1960 「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯 国学院大学考古学会
- 山内清男 1964 「画竜点睛の弁」『成城新聞』, 東京 (山内清男 1997『先史考古学論集』2 所収)
- 山内清男 1967a 「第2部日本の洞穴遺跡の研究 4 洞穴遺跡の年代」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査委員会編 平凡社
- 山内清男 1967b 「縄紋土器の改定年代と海進の時期について」『古代』第48号 (『先史考古学論集』2 所収)
- 山内清男 1968 「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』平凡社
- 山内清男 1969a 「縄紋時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』1 (『先史考古学論集』2 所収)
- 山内清男 1969b 「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』No.224
- 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄紋土器の古さ」『科学読売』12-13 (『先史考古学論集』2 所収)
- 山内清男・佐藤達夫 1964 「日本先史時代概説」『日本原始美術』1 (『先史考古学論集』2 所収)

5-4 村上論文に関するコメント

内田和典

5-4-1 はじめに

アムール川下流域の土器出現期にあたるオシポフカ文化は、更新世に遡る土器の利用，局部磨製を含む石斧，大形の両面加工尖頭器など，日本列島の縄文草創期との関係性・類似性が早くから議論されてきた。しかし現在，東アジアにおいて更新世に遡る年代値を有する土器が，中国南部・北部，シベリア東部，アムール川中流域，アムール川下流域，そして日本列島など各地にパッチ状に存在していることがわかり始めた（橋詰 2016）。村上論文（村上 2017）でも結論づけられているように，オシポフカ文化の土器と縄文草創期土器との型式学的な比較では，人類の直接的な交渉関係を読み取ることが難しい。さらに東アジアの土器出現期の様相を踏まえると，多様な視点から土器出現期の背景を検討する必要がある。そのためには，まず当該時期の課題を整理し，新たな視点からの研究の方向性を探ることが求められる。本稿では，村上論文へのコメントをとおして，オシポフカ文化の土器研究の現状と課題についてまとめたい。

5-4-2 オシポフカ文化の土器についての現状での理解

オシポフカ文化の土器は，出土土器が細片であり，摩耗・磨滅が激しいため文様や施文の内容をとらえることが難しい。ノヴォトロイツコエ 10 遺跡やオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡の出土状況を見ても，個々の土器破片の違いを認識することができても，全体像を把握すること自体が困難である。

さらに，アムール川下流域では，遺跡を形成する過程で供給される堆積物が少ないことから，後世の人類活動の影響を相当受けてしまう。そのため出土した土器がオシポフカ文化のものか判断することが難しかった。しかし，2000 年以降の日露国際共同調査を通じて，オシポフカ文化以降の新石器文化の土器研究が進められたことから，オシポフカ文化の土器を分類することがある程度可能となりつつある（福田ほか編 2011 など）。

また，これまでのオシポフカ文化の ^{14}C 年代値は，信頼性の高い年代値が提示されてきたとは言い難い状況であった。しかし，オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡で得られた年代値が，約 13,000 ~ 12,000 cal BP におおよそまとまる傾向にあり，将来的にオシポフカ文化の細分段階として「オシノヴァヤレーチカ 10 段階」の設定が可能となるかもしれない（橋詰ほか編 2016）。現実的に即対応が可能で解決できる問題，中長期的に取り組む必要がある問題，調査の工夫次第で解決できる問題など，階層的に問題群を整理して，資料を取り巻く問題を認識した上で最善の研究を進める必要がある。

5-4-3 オシポフカ文化の土器の共通点と器種・器形

本報告の村上論文でも指摘しているが，現状では縄文草創期土器とオシポフカ文化の土器について，共通性を抽出することは難しい。個々の土器に残された特徴を詳細に観察した結果，部分的な個別要素の共通性は認められているが，全体のまとまり（日本考古学の「型式」やロシア考古学の「文化」）として見た場合に差異の方が際立っている。村上氏が指摘した平底土器の共通点については，すでに早くから大貫静夫（1982，1992，1998 など）が，「極東平底土器群」として概念化している。極東平底土器群は，広域比較の視点から個別土器に現れる様々な属性の違いを捨象したものであり，東アジア地域における新石器文化を理解するための概念である。

村上論文の意義は，「極東平底土器群」の中で現れた文様や調整等の差異が，何を表すのかを縄文草創

期土器との比較の中で問いかけた点にあるだろう。

さて、オシポフカ文化の土器を考える上で、上記の共通性の問題と別に器種・器形の分化の問題にも注目する必要がある。アムール川下流域では、ガーシャ遺跡で著名な条痕文深鉢土器や、ゴンチャルカ 1 遺跡やオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡で確認されたような浅い盤形土器などが出土している。また、中国北部でも鉢以外の器形をもつ土器があり、東アジアの土器出現期においてすでにある程度の器種分化が進んでいることが想定される。出現期土器自体が、完形土器の出土資料数が少ないため、将来的な課題の一つであるが、器種・器形の分化については、深鉢や鉢以外のカタチも念頭に置く必要がある。

5-4-4 オシポフカ文化の土器の時間差

土器の時間的な位置づけを考える場合に、土器の分類から細分を行うことは当然であるが、オシポフカ文化の土器資料が未だ少ない状況なので、年代値や石器研究からも時間的な整理を行う必要がある。

村上氏も引用している小畑弘己（2004）による出現期（初期）土器の変遷と年代値との対比は、かつて梶原論文（1998）が分類した初期土器を時間的にどのあたりに位置するのかを検討したものである。近年では、國木田氏らを中心に、土器付着炭化物や遺構内出土の炭化物の年代値比較が進められてきたため、梶原論文で示された土器群の細分を検討できる状況が整えられつつある（Kunikita et al. 2013, 2014a, 2014b; 國木田・松崎 2016; 國木田ほか 2017）。今後とも年代値の蓄積は進められる必要がある。

石器についても完新世以降の石器製作技術とオシポフカ文化のそれとは異なるため、大枠での時間的な差異を把握することが、近年の石器研究からも可能となりつつある（長沼 2004 など）。

オシポフカ文化の時間的な細分を行う場合に、付着炭化物や木炭などによる年代値と土器型式分類との対比や、石器によるオシポフカ文化とそれ以降の大別を念頭に置いた上で、各資料の整理を行う必要がある。また、完新世以降の人類活動の影響を受けていない遺跡でオシポフカ文化の良好な資料の蓄積と同時に、オシポフカ文化以降の新石器文化の調査を進め、資料の蓄積を進めながら検討を行うべきである。

年代学や石器研究、さらに新石器文化土器の型式研究を含めて把握することで、オシポフカ文化の土器型式によって現れる差異が、時間差を示しているのか、交渉関係を示すのか、について検討が可能となるだろう。

5-4-5 おわりに

今回、村上論文で示されたように、日本列島と極東地域との土器型式における直接的な交渉は認めがたい。将来的に村上氏が試みた細分が日本列島との関係を紐解く可能性はあるかもしれないが、現状では資料的な制約が大きいので、別の観点から、土器が発生する条件とは何か？と問いかける必要があるだろう。

出現期土器の人類史における意義は、火を利用することで「土」が変化することをすでに知っていた人類が、火による土の化学変化を利用して、「器」を作り出し、自らの生活戦略を多様化させた点にあると考える。アムール川下流域で中長期的な取り組みを今後も続ける中で、こうした人類史の一側面について検討を進めていかなければならない。

引用文献

福田正宏・シェフコムード I.Ya.・内田和典・熊木俊朗編（大貫静夫監修）2011『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』, 285p., 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

- 橋詰 潤 2016「東アジアにおける土器出現期とオシノヴァヤレーチカ遺跡群の発掘調査成果」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vol.1, pp84-95, 長野,』明治大学黒耀石研究センター
- 橋詰 潤・シェフコムード, I. Ya.・内田和典編 2016『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 vol.1: オシノヴァヤレーチカ 12 遺跡 (2010 年) およびオシノヴァヤレーチカ 10 遺跡 (2012-2013 年) 発掘調査報告書』, 112p. + 20 plates, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 梶原 洋 1998「なぜ人類は土器を使いはじめたのか 東北アジアの土器の起源」『科学』68-4: 296-304
- Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Onuki, S., Yamahara, T., Matsuzaki, H. 2013 Dating charred Remains on Pottery and analyzing food habits in the Early Neolithic period in Northeast Asia. *Radiocarbon* 55 (2-3) : 1334-1340.
- Kunikita, D., Shevkomud, I., Yoshida, K., Matsuzaki, H. 2014a「Radiocarbon dates of charred remains on pottery and analyzing food habits of the Osipovka culture, Russian Far East」『環日本海北回廊の考古学的研究 (I) - ヤミフタ遺跡発掘調査報告書 -』, pp.108-113, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- Kunikita, D., Nesterov, S.P., Yoshida, K., Matsuzaki, H., Onuki, S. 2014b「Radiocarbon dates of charred remains on pottery of the Gromatukha site」『環日本海北回廊の考古学的研究 (I) - ヤミフタ遺跡発掘調査報告書 -』, pp.114-116, 北海道, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 國木田 大・松崎浩之 2016「2013 年オシノヴァヤレーチカ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期におけるアムール川流域における環境変動と人類行動 Vol.1』, pp.78-80, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 國木田 大・吉田邦夫・松崎浩之 2017「2004 年ノヴォトロイツコエ 10 遺跡出土試料の放射性炭素年代測定」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2-ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003-2004 年) 発掘調査報告書-』(本報告), pp.80-82, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 村上 昇 2017「オシボフカ文化と縄文時代草創期の土器の比較検討-縄文土器大陸起源論を念頭に-」『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 Vo.2-ノヴォトロイツコエ 10 遺跡 (2003-2004 年) 発掘調査報告書-』(本報告), pp.86-91, 長野, 明治大学黒耀石研究センター
- 長沼正樹 2004「アムール下流の土器出現期」『東アジアにおける新石器文化と日本』I, pp.129-139, 東京, 國學院大學 21 世紀 COE プログラム
- 小畑弘己 2004「シベリア・極東地域の初期土器研究について」『考古学ジャーナル』519: 15-20
- 小川(大貫) 静夫 1982「極東先史土器の一考察-遼東半島を中心として-」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』9: 123-149
- 大貫静夫 1992b「豆満江流域を中心とする日本海沿岸の極東平底土器」『先史考古学論集』2: 47-78
- 大貫静夫 1998『東北アジアの考古学』, 279p., 東京, 同成社

English summary

Some of the earliest pottery in the world has been found in the Oshipovka culture complex (approximately 15,500–11,400 cal BP). Further, the Oshipovka culture complex is an important case study to understand human responses to the paleo-environmental changes during the transition from the terminal Pleistocene to the initial Holocene. Our study's aim is to examine human behavior as determined by the findings in the Oshipovka culture complex. This archeological site report outlines the results of our investigation so far at the Novotroitskoe 10 site (excavation season: 2003–2004) in this area.

In 2003 and 2004, a new excavation was conducted at the Novotroitskoe 10 site by a joint Russian–Japanese research team. This site is located on a terrace near the confluence of the Ussuri and Amur rivers in Far East Russia, approximately 15 km in the southwest direction from the center of Khabarovsk. The relative height of the site is approximately 30–40 m from the present water level of the Amur river. The excavation revealed six layers. Layers 3 to 5 (especially Layer 4) revealed artifacts dating to the Oshipovka culture complex. More than 80 pottery fragments, 159 charred remains, and more than 351 stone tools have been excavated, including bowls and pot-shaped pottery fragments (some specimens have pitted decorations and/or comb-like impressions as well as finely grooved line patterns), bifacial points, scrapers of various types, one edge-ground ax, unifacial tools, microblades and microblade cores, hammer stones, one semi-bifacial arrowhead, one stone weight, and one stone abrader.

In total, the excavation area measures 47 m² and includes the following artifacts and assemblages by number of pieces found:

Points (including bifacial, semi-bifacial, and margin retouched points) 142

Stemmed point 1

Arrowhead 1

Blanks for a bifacial stone tool 29

Semi-bifacial stone tool 1

Microblade cores 4

Microblades 27

Spalls 7

Boat-shaped stone tool 1

Edge-ground ax 1

End scrapers (including bifacial, semi-bifacial, and margin retouched end scrapers) 29

Side scrapers 19

Retouched flakes 25

Utilized flakes 15

Elongated flakes 12

Cores 22

Hammer stones 2

Stone abrader 1

Stone weight 1
Rotary drilled pebble 1
Retouched pebble 1
Lithic raw material 2

(Subtotal of stone tools 351)

Pottery fragments 80

Charred remains 159

Total 590

The dominant lithic raw material used at the Novotroitskoe 10 site is a dark gray fine-grained rock (shale and/or hornfels), which was widely used for creating bifacial stone tools and microblades during the pottery emergence period. Flakes produced during bifacial stone tool thinning were used as the material for the flake tools (e.g., margin retouched points, margin retouched end scrapers, side scrapers, retouched flakes, and utilized flakes). Chalcedony and jasper cobbles, which were easily available near the site, were used as supplementary raw materials for making microblades.

¹⁴C dating results indicated that these finds were from around the early half of 11,000 ¹⁴C yr BP (ca. 13,000 cal yr BP). Therefore, the date of this site is likely to be approximately 13,000 cal yr BP, which is very close to the ¹⁴C dating of the samples from the Oshinovaya rechika 10 site located about 3 km northeast of the Novotroitskoe 10 site (Hashizume et al. eds. 2016). Moreover, the stone tools found at the Novotroitskoe 10 and the Oshinovaya rechika 10 sites have identical, or at least similar, characteristics (e.g., stone tool form and tool type composition, Fig.4-1).

These research results have expanded our understanding of site formation processes, lithic reduction sequences, pottery variations, and ¹⁴C dating at the Oshipovka culture complex, all of which require further extensive study.

Keywords: Pleistocene–Holocene transition, emergence period of pottery, Oshipovka culture complex, Novotroitskoe 10 sites, Russian Far East, lower Amur River Basin

(Jun Hashizume)

Reference

Hashizume, J., Shevkomud, I. Ya., Uchida, K. eds. 2016 Paleoenvironmental changes and Human behavior during the terminal Pleistocene in the lower Amur River Basin, Vol. 1: Excavations at the Oshinovaya rechika 12 site (2010) and the Oshinovaya rechika 10 site (2012–2013). 112p. + 20plates, Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, Japan (in Japanese with English summary).

Contents

Preface	
Explanatory notes	
1. Outline of this study and excavation at the Novotoroitskoe 10 site	1
1-1 Study purpose	2
1-2 Excavation procedures	2
2. Location and environment around the Novotoroitskoe 10 site	5
2-1 Location and environment around the Novotoroitskoe 10 site	6
2-2 Previous studies around the Novotoroitskoe 10 site	9
3. Excavations at the Novotoroitskoe 10 site (2003-2004)	13
3-1 Excavations at the Novotoroitskoe 10 site (2003-2004)	14
3-2 Methods	14
3-3 Excavation procedures	14
3-4 Stratigraphy and artifact distribution	16
3-5 Artifacts	18
3-5-1 Stone tools	23
3-5-2 Pottery	38
3-6 Conclusion of the Novotoroitskoe 10 site (2003–2004) excavation	48
Artifact attributes from the Novotoroitskoe 10 site (Tables)	51
4. Concluding remarks	69
4-1 Results	70
4-2 Future issues	71
4-3 Conclusion	72
References	75
5. Discussion	79
5-1 Radiocarbon dating of the Novotoroitskoe 10 site from the 2004 excavation	80
5-2 Comments on the radiocarbon dates	83
5-3 Comparative study of the pottery in the Oshipovka and the Incipient Jomon culture complexes from the perspective of an eastern Eurasian continent origin hypothesis for Jomon pottery	86
5-4 Comments on 5-3	92
English summary	96
Plates (PL. 1-13)	

写真図版
(PL.1 ~ 13)

